

# 中学校の諸活動におけるキャリア発達を促す教育活動の効果に関する研究

## —キャリア教育モデルプランの提示を基に—

Effects of the educational activities on promoting carrier development of students in the junior high school

- Development of the career education model plan -

兵庫教育大学教育実践高度化専攻 松本 剛, 古川 雅文

兵庫教育大学附属中学校 森 敏雄・戸出 彰男・辻本 恭隆・岸本 勝枝・相川美和子

(MATSUMOTO Tsuyoshi, KOGAWA Masahumi, MORI Toshio, TODE Akio, TSUJIMOTO Mitsutaka, KISHIMOTO Katsue, AIKAWA Miwako)

### (要 旨)

学校教育におけるキャリア教育の充実が求められている。本研究では、中学校におけるキャリア教育のモデルを提示し、学校現場で使いやすくかつ生徒にとっても魅力的な取り組みを開発し、キャリア教育の理論と実践の融合をめざした。そのため、中学校におけるキャリア発達を促進するために有効な教育課程を開発し、その検証をもとにキャリア教育モデルを作成した。1年目には、兵庫教育大学附属中学校における教育諸活動がキャリア教育を推進していくうえでどのような位置づけを持つものであるかを検証した。その上で、教育課程の編纂を行い、2年目は具体的な教材開発、教育実践を通して、その教育効果を検証し、それらによって生徒のキャリア発達がどのように進展したかを調査し「キャリア教育実践記録」としてまとめた。教育課程の検証をもとに、キャリア総合選択授業、アントレプレナー教育を計画実施し、生徒の発達段階に応じたキャリア発達プランに基づいた計画的なキャリア教育の実施により、生徒の意識がどのように向上したかについて、全生徒のキャリア意識の各項目に対する評定結果を分析した結果、基礎的なコミュニケーション能力の育成、将来のための学習や進路計画の重要性への認識、職業観・勤労観の育成、将来の夢や希望をもっている生徒が多数を占めていることなどに成果がみられた。一方で、生徒達は将来の重要性は認識し、ぼんやりした夢を抱いていて、今の学習などの努力の大切さも分かってはいるものの、より広い視野で調べ学習をしたり、将来目標のための努力をしたりという実際の行動に表れるところまでは至っていないという結果もみられ、今後のキャリア教育の継続的・発展的充実の必要性が示された。

キーワード：中学校、キャリア教育、教育活動の効果

Key words : junior high school, career education, Effects of the educational activities

## 1 研究の背景

キャリア教育の充実に関する閣議決定（教育振興基本計画、平成 20 年）を受けて、学校教育におけるキャリア教育の充実が求められている。しかしながら、どのような具体的方法や教材によってキャリア教育を推進していくかという学校全体で取り組むモデル作成は進んでいないのが現状である。

「キャリア」は「個人」と「働くこと」との関係の上に成立する概念であり、個人から切り離して考えられない。また、「働くこと」については、職業生活以外にも家事や学校での係活動、あるいはボランティア活動などの多様な活動があることなどから、個人がその学校生活、職業生活、市民生活等のすべての生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動として幅広く捉える必要がある（文部科学省、2006）。これまで小中高におけるキャリア教育の内容として、「4領域8能力（国立教育政策研究所、2002）」が提唱されてきたが、これらをはじめとしたこれまでの諸提言を踏まえ、共通する要素を再度まとめ、再構成した「基礎的・汎用的能力（文部科学省国立教育政策研究所、2011）」が提示された。学校ごとに育てたい態度や能力を定める上で「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」のどちらを当面の直接的な資料とするかは、学校や教育委員会の判断によるが、「4領域8能力」に依拠する場合には、「基礎的・汎用的能力」の内容と提唱の理由を十分に踏まえ、将来的な転換を視野におさめながら、キャリア教育の取り組みの改善を図っていくことが特に求められている。また、「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」はいずれも共通して、それぞれの学校・地域等の実情や、各校の生徒の実態を踏まえ、学校ごとに育成しようとする力の目標を定めることを前提として提示された点に注目する必要がある。

4領域8能力は、①人間関係能力（「自他の理解能力」・「コミュニケーション能力」）、②情報活用能力（「情報収集・探索能力」・「職業理解能力」）、③将来設計能力（「役割把握・認識能力」・「計画実行能力」）、④意思決定能力（「選択能力」・「課題解決能力」）を言う。基礎的・汎用的能力は、人間関係形成・社会形成能力（①）、自己理解・自己管理能力（①）、課題対応能力（③④）、キャリアプランニング能力（②③④）を指しており、（ ）内は4領域8能力との対応を示した。

本研究では、これらの能力を総合的に向上させることができる中学校におけるキャリア教育のモデルを提示し、その効果を検証した。学校現場で使いやすかつ生徒にとっても魅力的な取り組みを開発することをめざし、キャリア教育の理論と実践の融合をめざしたものである。これらの取り組みにより、生徒の職業選択への自信（Jepsen, 1975）の育成を目指すことができるプログラム開発を進める一事例としたい。

## 2 研究の目的・方法

本研究は、中学校におけるキャリア発達を促進するために有効な教育課程を開発し、その検証をもとにキャリア教育モデルを作成するものである。1年目には、兵庫教育大学附属中学校（以下兵庫教育大学附属中学校）における教育諸活動がキャリア教育を推進していくうえでどのような位置づけを持つものであるかを検証した。その上で、教育課程の編纂を行い、2年目は具体的な教材開発、教育実践を通して、その教育効果を検証し、それらによって生徒のキャリア発達がどのように進展したかを調査した。

## 3 兵庫教育大学附属中学校におけるキャリア教育

兵庫教育大学附属中学校では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な能力等を育てる教育」と位置づけ、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動をとおして指導してきた。教育目標である「人生をたくましく豊かに生き抜くために、考え、鍛え、行動する人間の育成」は、創立以来31年目を迎えた今でも、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成が中等教育の大切な任務であることを示唆している。

平成23年度より「理論と実践の融合」に関する共同研究を始め、「中学校の諸活動におけるキャリア発達を促す教育活動の効果に関する研究—キャリア教育モデルプランの提示を基に—」と課題を設定して研究を進めている。平成24年度には「生きる力」の育成を教育の柱とし、目指す生徒像に「自立と創造 社会的自立を目指し、自己の能力や創造性を伸ばす生徒」を新たに加えて、教育課程を編纂し直した。

これらの取り組みのねらいは、中学校におけるキャリア発達の促進を図るための有効な教育課程を開発し、その検証をもとにキャリア教育モデルを作成することにある。新学習指導要領に示す「特別活動（第5章）のねらい」に即して、キャリア教育の諸理論（機能理論、発達理論など）と関連づけながら、中学段階において必要なキャリア教育モデルを立案し、具体的な教材開発、教育実践を通して、その教育効果を測定し、キャリア発達の進展を検証するものである。さらに、平成24年度には、新たな取り組みとして、キャリア教育における基礎的・汎用的能力（文部科学省2011）と関連づけながら、中学段階において必要なキャリア教育モデルとして「キャリア総合選択授業」及び「アントレプレナー教育」を企画立案して実施した。

### （1）兵庫教育大学附属中学校の現状

兵庫教育大学附属中学校は国立大学附属校であり、県内各地から生徒が通学しているため、県内の公立中学と比較すると、「トライやる・ウィーク」などの職業体験活動が実施しにくい学校である。また、これまで総合学習に力を入れて研究を進めてきたため、24年度からの新学習指導要領実施に向けて教育課程を編纂し直す際、キャリア教育の推進、基礎的・汎用的能力育成という視点からの教育諸活動として組み直す必要があった。そこで、教育諸活動をキャリア教育の視点から捉え直し、PDCAサイクルで活動を評価することで、スリム化、内容の充実を図ろうとしている。

一方、本校では行事や生徒会活動が、生徒の主体的な活動を念頭においた取組として位置づいている。伝統的に自主性、責任感、思いやりの気持ち、協調性、コミュニケーション能力等を培ってきており、主体的に行動しようという生徒が多い。やや学力は2極化しているものの、非社会的行動、反社会的行動はほとんどなく、これまでの研究の取り組みによって学び合いの学習が定着してきている。このような現状から、本校はキャリア教育にかかわる諸活動がキャリア発達にもたらす効果を観察し、検証できる環境にあるといえる。

中学校においてキャリア教育を推進するには、単なる出口指導に陥ることなく、生徒の発達段階に応じたキャリア発達を促す教育が必要であり、キャリア教育について正しく理解させ、有効なキャリア教育履修を教育課程に位置づけて指導することが重要である。

キャリア教育推進、基礎的・汎用的能力育成という視点からキャリア総合選択授業やアントレプレナー教育を捉え、キャリア教育推進プログラムを構築することを通して、将来に夢を持ち、個性の伸長を図りながら、主体的に学ぶことができるような生徒を育成できるという仮説を立て、実践を通してこれらを検証している。また、活動を通して、キャリア教育で求められる「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を身につける事ができるということについても検証する必要がある。

### （2）必要となる教育課程の工夫

兵庫教育大学附属中学校では、兵庫県公立中学校が取り組んでいる「トライやる・ウィーク」と同等のキャリア教育に関する効果を期待する活動を25年度から実施する予定である。平成23年度から教育課程の整備を行い、第1学年50h、第2学年70h、第3学年70hに縮小された総合的な学習の時間を活用して、キャリア発達にとっての課題を明確にしつつ、生徒のモチベーションを高める取り組みとして、「キャリア総合選択授業」及び「アントレプレナー教育」を実施することとした。従来、総合的な学習の時間で実施していた行事関係をスリム化するとともに、道徳や特別活動の時間を確保し、なおかつ教科指導の時間を確保するという教育課程編纂は、かなりの困難を伴ったが、逆に、「生徒にとって必要か、それとも必要でないか」という視点で見直しができた。

### （3）校内における研究成果の評価方法

キャリア総合選択授業及びアントレプレナー教育については、「自己評価シート」を作成し、生徒一人一人が観点別にどのように取り組めたか、できるようになったことは何か、困難を感じたことは何かなどについて評価できるようにし、本校担当教員と大学の講座担当教員とで生徒の自己評価に基づく評価をすることとした。また、23年度に引き続きキャリア意識調査を実施・分析した。24年度の成果は評価を含めて実践記録集としてまとめ、次年度のバージョンアップを目指した。

#### (4) キャリア総合選択授業

キャリア総合選択授業は、大学教員と兵庫教育大学附属中学校教員が共同で行うキャリア開発につながることを目的とした生徒の関心別授業である。5月初旬に生徒向けオリエンテーションを行い、生徒に希望する講座を選択させて、選択教科希望調査用紙に記入させ、割り振りの後、講座ごとに2年、3年を講座ごとに20名程度のグループに分けて実施した。大学教員と兵庫教育大学附属中学校教員による「キャリア教育総合授業」は5～10月の11回実施された。友嬉祭(文化祭)などで学習した内容について生徒がまとめ発表し、その後2回の授業で総合的なふりかえりを行った。

##### 1) 開設講座について

本研究のための「キャリア総合選択授業」の講座内容は、以下の3部門とした。

A. サイエンス・心理部門。B. 人文・言語。C. ものづくり・心と体づくり

##### 2) キャリア発達促進を根底に置いた講座開設や内容等の充実について

- H中学教諭は講座のうちどれかを担当し、大学教員との共同共学を進める。
  - 講座は、オリエンテーションを含めて14回+友嬉祭とする。
  - 総合的な学習の時間を活用して(14時間)実施した。
  - 第2学年、第3学年を対象として、1つの講座を第2学年、第3学年が一緒に受講する形式とした。
  - 全13講座、1講座あたり15名程度とした。2年、3年の合計198名。
  - 1期(14回)とし、生徒は次年度に同じ講座を受講してもよいこととした。
  - 各講座の成果を生徒自身が発表した。
- 友嬉祭でのポスター掲示や第1学年を交えたポスターセッション研究発表等
- 作成したポスターはポスターセッション後も校内掲示することとした。
  - 友嬉祭後に「自己評価シート」を使って評価を行うこととした。

##### 3) 大学教員による意見・感想

担当大学教員の授業評価をまとめる。大学教員にとっても中学生への授業がさまざまな自分自身の気づきにつながったことが読み取れる。

###### i) サイエンス・心理部門

(心理学入門) 生徒は熱心に授業に取り組み、心理学により興味をもったと思われる。2・第3学年が一緒に学ぶ初めての試みなので、生徒の皆さんがすこし緊張しているようにみえるところもあったが、第2学年が第3学年になる次年度にはそれが普通になっているとよい。中学生に教えることで新鮮な体験ができた。

(数読!) 大変楽しく授業させて頂いた。生徒は、数学的に考えることへの興味関心の高さがうかがえた。生徒がどんな学習内容にどう取り組むかを間近でみることから、色々な研究のアイデアを得た。学習場面にかかわることは、数学教育学を研究している私自身にとっても、非常に勉強になった。

###### ii) 人文・言語部門

(絵本の世界を知ろう) 生徒の感想には、絵本を通して新たな発見があったことや、心ふるえる感動が得られたことなどが記されていて、私も同じ思いであったことをあらためて確認した。「今は認識できなくても、きっといつか身についていると思える日が来ると思う」という感想には私自身とても勇気もらった。

(一度じっくり考えてみよう!-哲学で始める頭のストレッチ-) 生徒たちは、当初はとまどいながらも、次第に発見を楽しみにできるようになっていった。制約の中ではあったが、発表そのものは堂々と伝えるべきことを語りかけ、相手の様子に応えようとする素晴らしいものであった。それは通常の授業などの裏付けがあつてのものであると思う。

(日本再発見-日本のとなりはポーランド-) まじめで熱心な学習態度に救われた。生徒の感性の豊かさに驚かされた。私自身見過ごしていたことに気付かされることも度々あり、感想を読むのがとても楽しかった。生徒と共有した時間は私自身もまた多くのことに気付く機会でもあった。

###### iii) 人づくり・ものづくり部門

(人間とリズム) 人間とリズムとのかわりの奥深さを知り、素直に驚きや感動を表現していたのが印象的だった。授業会場が音楽室でしたので、視聴覚機器や楽器の使用に関しては何の問題もなく授業を円滑に行うことができた。

(エンジニアリングに挑戦!!) 生徒の真剣なまなざし、実験や実習が成功した時の喜ぶ姿、次々に新しいアイデアを出しながら工夫していく姿が見られ、とても心強く感じた。本講座での学習を踏まえて、技術科の学習を深めてほしい。

#### (5) アントレプレナー教育

平成23年度、アントレプレナー教育の計画を立てるための視察及び文献検索などを進め、実施上の課題や期待される成果等に関する研究を進めた。



その結果、キャリア発達に寄与する取り組みとして、附属中学校におけるアントレプレナー教育のありかたを次のように企画立案し、実施した。

### 1) テーマ設定について

24年度は全学年、同じ教育内容で実施（第2学年は2年間、第3学年は1年間の教育計画とする）。内容が同じでも、学年による発達の違いや既習内容の違いがあり、同じような成果発表にはならないと考えた。25年度より教育内容構成を学年が上がるごとに推移させていくこととし、26年度からは、各学年の習得状況に応じた内容構成ができるよう計画している。

Table 1 アントレプレナー教育テーマ

学年	24年度 内容	25年度 内容	26年度 内容
第1学年8h	これはすごいもの	これはすごいもの	これはすごいもの
第2学年8h	これはすごいもの	ふるさとお土産プロジェクト	ふるさとお土産プロジェクト
第3学年8h	これはすごいもの	ふるさとお土産プロジェクト	ふるさとのまちをPR

### 2) 具体的な指導内容について

- 1年目は身近な文房具や調理器具、生活用品等で、この工夫はすごい、この発想はすごい、など、すごいと思う「モノ」「コト」について自分の考えをまとめて発表する。
- 総合的な学習の時間を活用して学年での発表を含めて8時間扱いとした。
- 1学期及び2学期で実施し、友嬉祭で学習発表することとした。
- 学習の成果は、友嬉祭でのポスター掲示やPPを使ってのプレゼンテーションなど、学年で工夫することとした。
- 作成した「ポスター」や「すごいモノ新聞」などは友嬉祭後も校内掲示することとした。
- 友嬉祭後に「自己評価シート」を使って評価を行うこととした。

### 3) 生徒の自己評価

アントレプレナー教育は、生徒が受け身に学ぶものではなく、自ら学習した内容をふりかえり、キャリア形成に役立てなければならない。「評価シートA」「評価シートB」を用いることにより、生徒自身がふりかえりを行い、さらに教師とのやりとりを重ねることによって、キャリア形成を促すことを試みた。

受講した生徒自身が自らの体験を「評価シートA」では発表を聞いた後に短時間で評価できるように、記述ではなく数値での評価を取り入れた。これにより、各発表後の意見交流に多くの時間を当てることをねらいとした。また、評価の観点を具体的に示すことで、生徒が発表を聞く上でのポイントを明確に持つことができるように工夫した。この工夫により、発表後の意見交流では、3つの観点到に沿った意見が交わされた。評価の観点的の1～3は、今回のアントレプレナー学習の目標を具体化させた内容になるよう配慮した。

プレゼンテーション交流会終了後には、「評価シートB」を活用した。これは「評価シートA」とは異なり、10～15分の時間をとり、自由記述形式で書かせるようにした。ただ、ここでも学習目標の明示を意識している。このように、繰り返し学習のねらいを生徒に示すことで、授業を貫く課題に対する意識を強く持たせるように工夫した。また、「今後の生活にいかしていきたいと思うことなどをまとめましょう」と問うことで、今回の学びを最終的には生徒の日常生活へと戻していくことを意識している。

評価シートA

評価シートB

「すごい商品」をプレゼンテーションしよう

( ) 組 氏名( )

○「評価の観点」にそってプレゼンテーションを聞き、相互評価をしましょう。  
(とてもよい…3、よい…2、みつう…1、よくない…0)

発表者氏名	1 スライド (3点)	2 発表の仕方 (3点)	3 発表の内容 (3点)	総合評価 (9点)

※ 最もよかった発表者の名前を書きましょう。( )

**評価の観点**

1 スライドについて

- ① 文字や画像などの大きさや色は見やすいか。
- ② 図・表・画像などを効果的に活用しているか。
- ③ 長い文章を書かず、キーワードにしているか。
- ④ スライドの構成が工夫しているか。
- ⑤ アニメーションを効果的に活用しているか。

2 発表の仕方について

- ① 聞き手の方を見て話しているか。
- ② 大きな声で発表しているか。
- ③ 声の抑揚、速さ、間の取り方を工夫しているか。

3 発表の内容について

- ① 不必要な情報を盛り込んでいないか。
- ② 商品開発の歴史、開発者の努力、商品に込められた想いや工夫、商品が社会で果たしている役割のいずれかについて、詳しく説明できているか。また、深く考えることができるか。

○ 学習の振り返りをしよう。

今回の総合学習の目標は次の2つでした。

- ① 「すごい商品」について調べることで、「商品に込められた想いや工夫」「商品開発の歴史や開発者の努力」「商品が社会で果たしている役割」について知る。
- ② プレゼンテーションの方法について理解する。

この目標を踏まえて、あなたが学習を通して学んだことや、今後の生活にかかしていきたいと思うことなどをまとめましょう。


Fig.1 アントレプレナー教育評価シート

### 3) 各学年の取り組み

各学年におけるアントレプレナー教育の取り組みとそれへの生徒の評価などをもとに、教員による成果と課題がまとめられた。これらの内容は、次年度以降のアントレプレナー教育を初めとするキャリア教育全体に反映される。

#### ① 第3学年アントレプレナー教育 実践内容

第3学年におけるアントレプレナー教育の内容について以下にまとめる。

Table 2 第3学年アントレプレナー授業の指導内容

教科名	総合	指導者	第3学年教員	場所	教室・コンピューター室・北館
主題	アイデアが一杯				
目標	○生徒の身の回りにあるヒットした商品やサービスなど「すごいもの」について調べることで、起業家の工夫や努力に気づき理解を深めることができる。 ○ICTを活用し、情報を収集・整理するとともに、得られた情報をわかりやすく伝えることができる。				
内容	回	実施日	計画	実際の内容の概略	
	1	5/16	○オリエンテーション	○課題の提示、身近な製品やサービスの商品化までの過程について調べることを説明する。商品開発の例をいくつか紹介する。(ポストイットなど) ワークシートに記入する。	

2	5/23	○すごいものについて調べる	○自分自身または家族や友だちが使っている製品やサービスで日頃から便利だなーと思っているものについて考える。インターネット、図書館の本、雑誌など利用して調べる。ワークシートにまとめる。
3 4	6/6 6/20	○身の周りの起業家について知る	○前時で調べた製品やサービスについて、考えて世に出した人がどのような人だったのか、どのように開発したのかを調べワークシートにまとめる。調べて分かったことに関しての感想をまとめる。次回発表までに新聞形式でまとめる。
5	7/4	○グループ内発表	○グループ内で調べた物について発表し、意見交換、質疑応答、感想発表を行う。他の人の発表を聞き、相互評価を行う。グループの代表を1名決定する。 時間が余りそうな場合は最初に発表練習などさせる。
6	7/11	○クラス発表	○グループの代表者（8名）が、ポスターセッション形式で発表する。1人発表3分、質疑応答2分。相互評価を行い、感想等も記入して発表者に渡す。
7	7/18	○活動の振り返り、自己評価	○学習を通しての感想・まとめ・自己評価を行う。
8	10/27	○友嬉祭にて展示発表	○個人が作成したアントレプレナー新聞を学級に展示する。生徒は作品を見て、優秀作品を3点選出する。
9	11/28	○学年発表	○選出された代表3名が学年発表を行う。
費用等 個人新聞用紙100枚、台紙用色紙100枚を購入した。			

### i) 第3学年の実践内容

#### (1) グループ内発表の様子

グループ内で調べた物について発表し、意見交換、質疑応答、感想発表を行った。1人発表3分、質疑応答2分で行った。少人数グループでの発表なので、発表者も説明を聞く生徒もリラックスした雰囲気の中で発表や質疑応答をしていた。相互評価後にグループの代表1名を選出し、代表者の発表を改善できるようにアドバイスをを行う姿が見られた。

#### (2) クラス内発表の様子

グループの代表者（8名）が、ポスターセッション形式で発表した。8名の発表者のもとに3人ずつの生徒が集まり、発表を行った。時間設定は発表3分、質疑応答と相互評価、感想記入を2分とした。発表者は同じ説明を8回行うことになり、後半になるにつれて説明が具体的になるなど、ポイントを押さえた説明ができるようになっていた。

#### ii) アントレプレナー学年別発表会・友嬉祭発表会の様子

友嬉祭にて展示発表を行った。

各クラスに各自が調べたモノやサービスについての新聞を展示し相互評価を行った。

相互評価の結果、優秀作品を学年で3点選出した。

#### iii) アントレプレナー教育評価シートについて

##### (1) クラス発表での相互評価について

クラス発表では相互評価と感想記入を行った。感想欄には感想だけでなく、質問・アドバイスを記入するように指導した。

相互評価については評価の観点3つを示し、発表後に短時間で記入できるように1～4までの数字から選択するような方法を取り入れた。

- ①発明のエピソード・製品の詳しい情報を調べている。
- ②聞いている人にわかりやすい説明ができています。
- ③図や写真を使用し、丁寧にまとめている。

生徒の感想例を以下に示す。

「昔と現在を比較して説明していたので良かった。」「ほんの些細なことが大きな発明になることがわかった。」「よく調べていてわかりやすかった。もう少し、絵や写真があれば良かった。」「絵がとても丁寧でたくさんの色を使ってきれいにまとめていた。」「漢字の読み方など事前をしっかり調べるともっと良くなると思う。」「はきはきとした発表でとても聞きやすかった。」「エピソードや作られた過程をうまくまとめていた。質問にうまく答えられていた。」「文字量が多すぎず、少なすぎずちょうど読みやすい量だった。」「説明文をそのまま書き写すのはいまいちかも。せつかくいい図を書いているのでもっと利用すべきだと思った。」「図や文はわかりやすいが説明が早口だったのでわかりにくかった。もう少しゆっくりと言えたらいいと思う。」

## (2) 授業後の自己評価について

授業後に授業全体を振り返る自己評価シートの記入を行った。以下の6つの項目について記述式で評価を行う方法を取り入れた。

- ① 学習内容に興味を持って取り組んだか。
- ② 製品やサービスがヒットした理由を考えることで、何か新しい発見があったか。
- ③ 新しく開発された製品やサービスが、皆に使われるようになるために必要な要素がわかったか。
- ④ 新しい製品やサービスは私達の生活に何らかの影響を与えているか。
- ⑤ 発表を通して、互いに学び合いながらグループで活発な意見交換ができたか。
- ⑥ 学習への取組を振り返り、改善したい点及び反省点はなにか。

### 項目⑤の感想例

「グループのみんなから、自分とは違う目線でいろいろなアドバイスをもらうことができました。「試し書きをさせてみては?」（この生徒はクルトガというシャープペンシルについて調べていた）という意見をもらって、いい発表ができたと思います。」

「自分では気づかなかった点や、何も思わなかったことを指摘され、「なるほど」と思いました。いろいろな視点から見ることでより深い内容になることが分かりました。良い質問をしてくれた人もいました。」

## iv) 第3学年アントレプレナー教育 成果と課題

成果として、以下に示す5点があげられる。

- ① 生徒が自分の興味を持つ物について調べるため、非常に意欲的に取り組む姿が見られた。
- ② 生徒の身の回りにある「すごいもの」について、起業家の工夫や努力に気付き理解を深めることができた。
- ③ ICTを活用し、情報を収集・整理し、得られた情報を新聞形式にまとめて伝えることができた。
- ④ 自分の調べた内容をわかりやすく伝えるための具体的な方法について理解が深まった。
- ⑤ グループ内の生徒とコミュニケーションを図りながら発表内容を改善していくことができた。

課題としては、以下の3点があげられる。

- ① 第1時のオリエンテーションで調査するモノやサービスの例を挙げて説明したが、各自でテーマ設定する場面になると、例で挙げたモノやサービスや生徒のごく近くにある品物（文房具など）に偏る傾向が見られた。テーマ設定の際には、生徒が日頃意識していないが便利なモノやサービスについて気づかせるような教師の働きかけが必要である。
- ② 教師が生徒につけさせたい力を意識し、そのつけたい力を意識した自己評価ができるような評価項目の吟味をする必要がある。
- ③ 学年に応じたキャリア発達を促進するために、生徒個々のキャリア発達課題の把握し、授業計画を作成する必要がある。

これらの成果と課題をふまえて今後は、第1学年から第3学年に向け継続的・系統的なキャリア教育に取り組み、自らが考案した新規の事柄が社会貢献につながるような活動に取り組みせたい。例えば地域の事業所や商工会と連携し、地域の活性化につながる新しいモノやサービスについて提案を行っていく。生徒が考えた事柄が実際の社会に貢献できるかどうかは、社会からのフィードバックが大切であると考え。事業所等と連携し、ゲストティーチャーを招いた講演を行ったり、具体的な提案について意見交換を行ったりするなど生徒の夢物語ではなく実現可能な提言ができるような取組をしていきたい。

## ② 第2学年アントレプレナー教育 実践内容

第2学年におけるアントレプレナー教育の内容について以下にまとめる。

Table 3 第2学年アントレプレナー授業の指導内容

教科名	総合	指導者	第2学年教員	場所	教室・コンピューター室・北館
-----	----	-----	--------	----	----------------



主題	「すごい商品」を紹介しよう！			
目標	○「すごい商品」について調べることで、①商品に込められた知恵や工夫②商品開発の歴史や開発者の努力③商品が社会で果たしている役割 について理解を深めることができる。 ○分かりやすいプレゼンテーションをするための技術を習得することができる。			
内容	回	実施日	計画	実際の内容の概略
	1	5/17	○身近にある製品やサービスを分類する。	○自分自身または家族や友だちが使っている製品やサービスについて、その商品が生まれた発想という観点で分類をさせた。
	2	5/24	○「すごい商品」を紹介するプレゼンテーションを作成する。	○それぞれが選んだ「すごい商品」について、①商品に込められた知恵や工夫②商品開発の歴史や開発者の努力③商品が社会で果たしている役割 という3つの観点で調べさせた。
	3	5/31		
	4	6/7	○プレゼンテーションの練習をする。	○調べた内容を4枚のプレゼンテーションシートにまとめさせて、発表練習をさせた。
	5	6/15	○グループでプレゼンテーション交流会を実施する。	○生徒を7グループに分けて、各グループでプレゼンテーションの交流をさせた。交流後、評価を付箋に書かせて意見の伝え合いをさせた。
	6	6/21	○交流から得た課題を基にして、プレゼンテーションを修正する。	○プレゼンテーションの交流から得た課題を基にして、よりよいプレゼンテーションになるように内容の再検討をさせた。
	7	6/29	○1回目とは異なるグループを編制し、プレゼンテーション交流会を実施する。	○聞き手に分かりやすく伝えるだけでなく、聞き手を引きつける話し方を意識させながら、プレゼンテーションの練習をさせた。
	8	7/5	○各グループの代表者による、学年でのプレゼンテーション交流会を実施する。	○1回目とは異なるグループを編制し、各グループでプレゼンテーションの交流をさせた。交流後、最も評価の高い発表者を1人決めさせた。
	9	7/12	○プレゼンテーション作成から学んだ内容を、掲示用として画用紙にまとめる。	○各グループの代表者8名による、学年でのプレゼンテーション交流会を実施した。各発表後には、聞き手からの感想・意見・質問などを発表させた。
	10	9/27		○プレゼンテーション作成から学んだ内容を、掲示用として画用紙にまとめさせた。
	11	10/3		
※	10/27	○友嬉祭で掲示物の教室展示、及び学年代表者によるプレゼンテーションを実施する。	○友嬉祭で、前時にまとめた掲示物を教室に展示した。さらに、全校生徒に向けて、学年代表者4名によるプレゼンテーションも実施した。	
費用等	○画用紙100枚、両面テープ15個を購入した。			

生徒による「学年でのプレゼンテーション交流会」においては、パワーポイントによるプレゼンテーション、生徒間における質疑応答が行われた。また、「友嬉祭におけるポスター展示・プレゼンテーション」も行われた。友嬉祭では、学年プレゼンテーション交流会において特に評価の高かった4名の生徒がステージ発表をした。発表の仕方・内容ともにとっても分かりやすくすばらしいものであった。また、発表者以外の生徒には、プレゼンテーションシートをプリントアウトしたものを画用紙に貼らせ、そこに発表内容をまとめさせた。そして、それ学習成果の紹介として、教室に展示させた。

#### i) 第2学年におけるアントレプレナー学年別発表会・友嬉祭発表会の様子

プレゼンテーションの交流を通して、「すごい商品」について、①商品に込められた知恵や工夫 商品開発の歴史や開発者の努力③商品が社会で果たしている役割 について理解を深めることができた。また、分かりやすいプレゼンテーションをするための技術を習得することができた。

学年プレゼンテーション交流会では、8名の代表者によるプレゼンテーションとその評価、発表に対する意見交流を実施した。具体的には、プレ



ゼンテーション後、フロアにいる聞き手の生徒に「評価シートA」（次項で紹介）を記入させ、意見・感想・質問等を発表させた。そして、8名すべてのプレゼンテーション終了後に「評価シートB」（次項で紹介）を記入させ、すべての学習を通しての自己評価をさせた。以下に、その文章を紹介する。

「例えばペンだったら、その1本のペンの開発だけに会社やその会社で働いている人、お金も関係していて、ただ使っているだけでも会社では細かい工夫がされていてすごいと思いました。それに、新しいものを作るときにも、古い歴史を参考にしあって、まさに温故知新だと思いました。プレゼンテーションは、一人でやってみたときは見やすいと思っていたけど、いろいろな人の感想を聞いて参考になりました。また、色の効果も重要だと思いました。」 「プレゼンテーションはただ話すだけではなく、聞き手の反応が大事だということがわかったので、ふだん話しているとき、聞き手はどのように聞いているのかをしっかりと見て話ができたらいいと思いました。」 「私はこの学習で自分が調べたことや人が調べたことから、開発者の努力や歴史について分かりました。何十年もかけて作り上げた商品もあり、それには開発者の思いがたくさんあると思いました。」

初回の授業から、学習のねらいを具体化したものを評価の観点として生徒に示した。また、各授業の導入や展開の際にも、繰り返し学習目標を提示するようにした。それにより、相互評価や自己評価の際、生徒に明確な評価のポイントを持たせることができた。

教師の評価方法としては、生徒の学習への取り組みの様子、ワークシートに記入した自己評価の内容、作成したパワーポイントの内容、発表の仕方等を総合して評価を行うことにした。

## ii) 第2学年アントレプレナー教育 成果と課題

第2学年アントレプレナー教育の成果と課題を示す。以上の成果と課題を来年度へと生かしていきたい。

成果は次の3点があげられる

- ① ICT機器を有効活用することで、分かりやすい発表をさせることができた。今回生徒が身に付けたパワーポイントソフトの活用方法やプレゼンテーションの方法は、社会へ出たときにも十分に生かされる力であるだろう。
- ② 生徒に強い学習意欲を持って課題に取り組みせ、理解を深めさせることができた。その理由の1つとして、生徒自身が興味を持った商品を選択して、調べ学習を展開したことが挙げられる。自己選択した課題により生徒の主体的な学習を促すことができた。
- ③ 協働学習により学習の深まりが生まれた。具体的には、1回目のプレゼンテーション交流会後の相互評価の方法として、それぞれの発表に対して気付いたことを付箋に書かせ、相手の机の上に貼っていくようにさせた。これにより、2回目のプレゼンテーション交流会へ向けての改善点を具体的に持たせることができた。その他の学習展開の中でも、協働学習を意図的に取り入れることで、生徒が主体的に理解を深められるように工夫することができた。

課題は次の2点があげられる。

- ① 調べ学習の手段としてインターネットを活用させたことにより、その膨大な情報の取捨選択のみに生徒の意識が集中してしまい、肝心の考察を深めさせる時間が十分に持てなかった。よって、完成したプレゼンテーションの中には、ただ情報を編集しただけの作品がいくつか見られた。じっくりと情報と向き合うことで、各自の考察を深めさせるような場を設定していくことが今後の調べ学習を展開していく上での課題となった。
- ② 効率的かつ客観的な評価方法を確立していくことである。生徒は今回の学習を通じて、数多くの成果物（プレゼンテーションシート、自己評価シート、掲示物等）を作成している。これら一つひとつに対して、正当な評価をしていくにはかなりの時間がかかることが予想される。よって、効率的な評価方法の確立が必要である。また、生徒が学習のまとめとして書き上げた自己評価シートを教師の評価とどのように関連させていくか、つまり、客観的な評価方法の確立も課題である。

## ③ 第1学年 アントレプレナー教育 実践内容

第2学年におけるアントレプレナー教育の内容について以下にまとめる。

Table 4 第1学年アントレプレナー授業の指導内容

教科名	総合	指導者	第1学年教員	場所	教室・コンピューター室・北館
主題	「身近にあるすごいもの、起業家について」ポスターセッションをしよう!				
目標	○「みんなのためになるようなこと」や「こういうことがあれば便利だという仕組み」や「こういう物があれば便利だ」という「すごいもの」について調べ、商品に込められた知恵や、工夫、商品開発の歴史、商品が社会で果たしている役割などについて知る。				

	○調べたことやわかったこと、感想を個人レポートにまとめることができる。			
	○調べたことやわかったこと、感想をグループでポスターにまとめることができる。			
内容	回	実施日	計画	実際の内容の概略
	1	5/22	○オリエンテーション	○この授業の内容、目標について、ある商品を例に説明を行った。
	2	6/5	○調べ学習①	○個人が、インターネットを使い、「身近にあるすごいもの」について、商品に込められた知恵や工夫、商品開発の歴史、商品が社会で果たしている役割という3つの観点で調べ学習を行った。
	3	6/12	○調べ学習②	
	4	7/3	○調べ学習③	
	5	7/10	○個人レポート作成	○それぞれが調べた「身近にあるすごいもの」について、3つの観点にまとめ、レポートを作成した。
	6	7/13	○グループ内発表会(意見交流)①	○作成した個人レポートをもとに、生徒を9グループ(内容が似ているもの)に分け、意見交流を行った。交流後、グループ毎にポスターにまとめ直し、発表練習を行った。
	7	7/17	○グループ内発表会の準備②	
	8	9/5	○グループ内発表会の準備③	
	9	9/21	○学級内でのグループ発表会	○評価シートをもとに、学級内でグループ発表会を実施し、相互評価を行った。その際、学級代表を2グループ選出した。
	10	10/10	○学年発表会	○各学級2グループ、計6グループによる学年発表会を実施した。
	11	10/21	○自己評価	○今回の総合を通して、振り返りシートをもとに、それぞれの観点について、自己評価をし、今後の学校生活に生かしていきたいことについて、自由記述を行った。
	※	10/27	○友嬉祭でグループで作成したポスターを教室に掲示する。	
	費用等	○模造紙30枚、油性マジック24セットを購入した。		

ポスター作成の後、学級での発表会を行い、学年単位でのポスター発表会においては、質疑応答も行われた。

#### i) アントレプレナー学年別発表会・友嬉祭発表会の様子

学年のねらいを次のように定めた。①「すごいもの」について調べ、商品に込められた知恵や、工夫、商品開発の歴史、商品が社会で果たしている役割などについて知る。②他者にわかりやすく説明することができる。

各クラス2グループ、合計6グループによる発表とその評価、および自分のまとめた内容との比較、およびアントレプレナー学習全体の振り返りを行った。具体的には、内容についてグループ全員で発表し、各グループで作成したポスターを掲示した。そして、グループ発表後、質疑応答を行った。質疑応答終了後、教室で、評価シートを見ながら、振り返りシートに記入させ、学習のまとめとした。以下に生徒の振り返り文を紹介する。

「学年全員の前で、グループ発表を行うのが初めてであった。しかし、どのグループも学級発表会で選ばれた優秀作品に改良を加えたものであったので、すばらしい発表を行うことができた。」

「グループで発表用に作成したポスターは、友嬉祭にて教室に掲示した。他の学級の同級生や2・第3学年の評価をもらうことで、次の調べ学習への意欲が高まった。」

#### ii) 評価

授業中に、学習の目標を具体化したものを評価の観点として示した。それによって、生徒は、目標をもって学習に取り組むことができた。また、教師側の観点としては、生徒の学習への取り組みの様子、評価シートに生徒が記述した内容、グループごとに作成したポスターの内容、学級発表・学年発表での様子を総合して評価した。「評価シート A」では、発表後、短時間で記入できるように、3段階を取り入れた。時間の有効活用をね

らいとし、学級内でのグループ発表会及び学年別発表会で活用した。

生徒の感想を以下に列記する。

「グループでポスターを作るときには、アイデアがまとまらなくて、どうしたらいいのかわからずとても不安でした。何回も内容について話し合い、ポスターを仕上げることができました。発表するためには、最後まで責任をもって一生懸命な気持ちで取り組むことが大切だと思いました。」

「学習が始めたころは、普通にあるものを調べても、おもしろくないだろうと思っていました。しかし、詳しく調べていくと、「のりにはこんな歴史があるんだ」とか、他のグループの発表を聞いて、「この道具にはこんな工夫の歴史があったんだ」などが詳しくわかり、とても興味が出てきました。これからの「ものづくり」の学習に役立てたいです」

「今日、みんなの発表を聞いて、自分が知らなかったことがたくさんあって、みんな詳しく調べていてすごいなあと思いました。また、自分たちのグループも学年全員の前で発表しました。とても緊張したけど、自分の言いたいことがはっきり発表できたので、よかったです。これからは、自分で調べたことやみんなが発表していたことを自分の生活にとり入れたいです。」

### iii) 第1学年アントレプレナー教育 成果と課題

成果として、次の4点があげられる。

- ①自分が興味をもった商品を選び、それについて深く調べることで、最後まで学習意欲を高めることができた。
- ②自分の調べた内容について、グループ内で発表し、お互いに意見を交流することで、より良い内容に仕上げることができた。
- ③共通点のある商品やサービスを調べた生徒が集まって、新しいグループを作り、ポスターにまとめて発表したため、生徒間の協力がしっかり行われた。
- ④調べた内容についての感想を書かせるなどの言語活動が生徒全員に取り組むことができた。

一方、課題として次の3点をあげることができる。

- ①発表後の質疑応答が活発ではなかった。
- ②集めた情報の編集とそれについての感想で終わった。調べた内容を考察し、新たな疑問を見つけるところまで生徒を高めることができなかった。
- ③計画した時間よりも調べる時間が長かかった。また、インターネットでの資料検索が中心であったので、情報をホームページ上で見つけるのに苦勞する生徒もいた。生徒の関心が深い商品の資料が見つからない場合の対処方法を考えておく必要がある。

## (6) 職業体験

兵庫県で実施している「トライ・やる ウイーク」はキャリア発達を促し、生きる力を育成する取り組みとして全国から評価されている。近年、国立大学附属中学校においても職業体験を「トライ・やる」に習って実施するところが見られる。附属中学校はこれまで、半日程度の兵庫県における地場産業の見学や職業体験、「ひょうごの匠」事業による職業体験を実施してきた。今後は、立地や生徒の構成など物理的な制約を鑑みつつ、可能な範囲で附属中版「トライやる」を実施できるよう準備を進めることとする。

## 3 生徒へのアンケート調査によるキャリア教育プログラムの効果検証

兵庫教育大学附属中学校における教育課程の検証をもとに、キャリア総合選択授業、アントレプレナー教育を計画実施し、生徒の発達段階に応じたキャリア発達プランに基づいた計画的なキャリア教育の実施が、生徒の意識がどのように向上したかについて、プログラム実施後の2月、生徒に対するアンケート調査により検証した(古川他, 2013)。調査は、中学生の日常生活の行動について捉えるとともに、それらと彼らのキャリア発達に関する意識の間の関係を再び検討することとした。その際、キャリア発達に関する質問項目を、文部科学省(2011)の提唱する「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」(いわゆる4領域8能力)の観点から見直し、より中学生に合った具体的な項目から構成するように工夫されている。

### (1) キャリア能力に対する生徒の自己評価

全生徒のキャリア意識の各項目に対する評定の平均値(Fig. 2)を見ると、生徒達が自分で「できている」と思っている能力としては「5「ありがとう」や「すみません」がはっきり言える」「4挨拶や返事がしっかりできる」という項目が高得点である。基礎的なコミュニケーション能力は育成されていると考えられる。

また、「9 将来のためにいま学習することは大切だ」「12 今の生活や勉強が、将来の生き方に影響する」「16 自分の将来のための進路計画を立てることは大切だ」という項目も高得点である。将来のための学習や進路計画の重要性は認識している。さらに、「13 あなたのまわりの仕事や、あなたの生活に役立っている」「10 働くことの大切さや、働く人の喜びやつらさなどを知っている」「11 集団の一員としての役割分担を理解し、責任を果たそうとしている」の項目も比較的高い平均値を示していることから、職業観・勤労観も育成されていることがうかがわれる。そして、「14 将来あんなひとになりたいなあ」と憧れる人がいる」「15 将来の夢や自分のなりたい職業について、考えることがある」も比較的高得点であり、将来の夢や希望をもっている生徒が多いことを示していると思われる。



これに対して、「1 自分のよいところを見つけようとしている」「6 自分の考えを上手に伝えることができる」といった、より深い自己理解、コミュニケーション能力については、今ひとつ自信の無さが表れている。また、「7 新聞やニュースから、社会の出来事を知ろうとしている」「8 進路や職業に関する情報を新聞・テレビ・インターネットを利用して調べる」「17 将来の進路のために、目標を立てて努力している」という項目は、低得点である。

これらの結果から、生徒達は将来の重要性は認識し、ぼんやりした夢を抱いていて、今の学習などの努力の大切さも分かってはいるものの、より広い視野で調べ学習をしたり、将来目標のための努力をしたりという実際の行動に表れるところまでは至っていないように見受けられる。

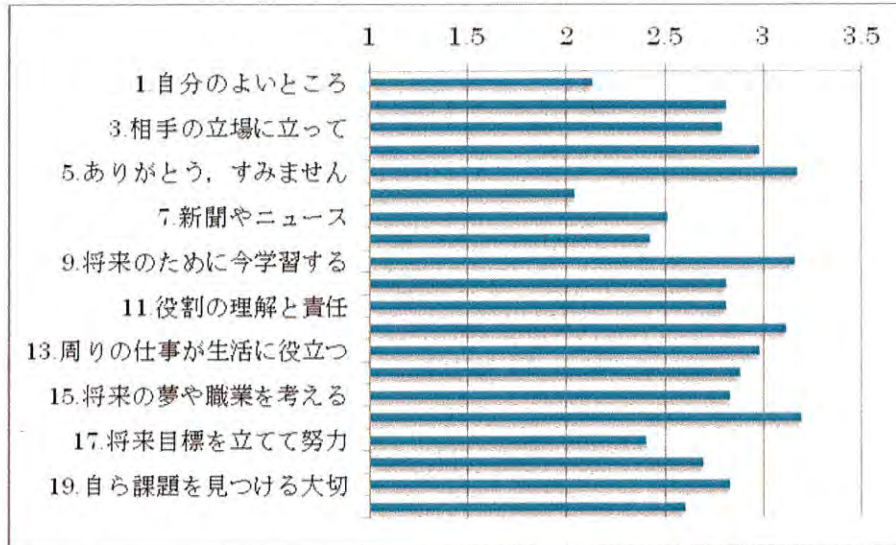


Fig.2 中学生のキャリア意識の平均値

## (2) キャリア意識の分類

本研究で調査したキャリア意識について、その構造を探るために、因子分析を行った。しかし、意味のある因子を抽出できなかった。そこで、項目間の相関係数を参考にしながら、作成時に基にした4領域8能力の表（文部科学省，2011）と見比べながらグルーピングをした。それらの項目と、クロンバックの信頼性係数を Table5 に示した。

Table5 キャリア意識尺度のグルーピング

	α 係数
<b>I. 自他の理解能力</b>	.69
1. 自分のよいところをつみつけようとしている	
2. 友達のよいところを見つけようとしている	
<b>II. コミュニケーション能力</b>	.70
3. 相手の立場に立って考えようとする	
4. あいさつや返事がしっかりできる	
5. 「ありがとう」や「すみません」がはっきり言える	
6. 自分の考えを相手に上手に伝えることができる	
<b>III. 情報探索と計画実行の能力</b>	.75
7. 新聞やニュースから社会の出来事を知る	
8. 進路や職業の情報を新聞・インターネット等で調べる	
14. 「将来あんな人になりたい」とあこがれる人がいる	
15. 将来の夢や自分のなりたい職業について考える	
16. 自分の将来のための進路計画の大切さ	
<b>IV. 職業理解と役割理解の能力</b>	.74
9. 将来のために今学習することは大切だ	
10. 働くことの大切さ、働く人の喜び・つらさを知っている	
11. 集団の一員としての役割分担の理解、責任を果たす	
12. 今の生活や勉強が将来の生き方に影響する	
13. あなたの周りの仕事が、生活に役立っている	
<b>V. 選択と課題解決の能力</b>	.77
17. 将来の進路のために目標を立てて努力している	
18. 自分の個性や興味関心に基づいてよりよい選択	
19. よりよい生活などのため、自ら課題を見つける大切	
20. 積極的に課題に取り組み、自ら解決していこう	



### (3) 進路に関する会話と進路意識の関係

家族、友達、教師といった周りの人々との進路に関する会話の頻度と、キャリア意識の関係を検討するため、それぞれの会話の頻度を独立変数とし、キャリア意識尺度のグループ別の得点（項目得点の平均値）を従属変数とする1要因分散分析を行った。

その結果、Fig. 3に示すように、家族と自分の将来や進路について話すことが多いほど、「情報探索と計画実行の能力」(F(3, 90)=4.01, p<.05) および「選択と課題解決の能力」(F(3, 90)=2.70, p<.05) の得点が高かった。また、兄弟姉妹と進路のことについて話す程度に関しても同様に、「情報探索と計画実行の能力」(F(3, 82)=3.19, p<.05) との関係が見られた (Fig. 4参照)。家族については、一昨年と同様の傾向であったが、今回は、きょうだいとの間でも見られ、とくに「情報探索と計画実行能力」に関連が深かった。生徒のキャリア発達に関する家庭での会話の重要性を示す結果と考えられる。

ところが、友人との会話頻度に関しては、逆に、よく話をするほど答えた者の「職業理解と役割理解の能力」の得点が低かった。具体的などのようなことからこのような結果が導かれたか興味深い。また、教師との会話に関しては、一昨年の結果と同様に、今回も有意な結果は得られなかった。

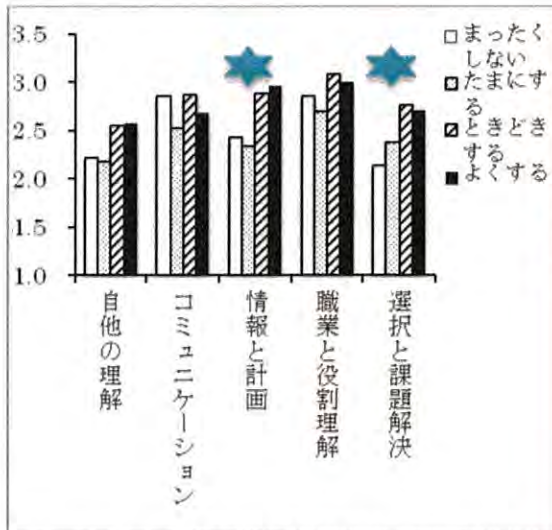


Fig. 3 家の人との会話頻度とキャリア意識

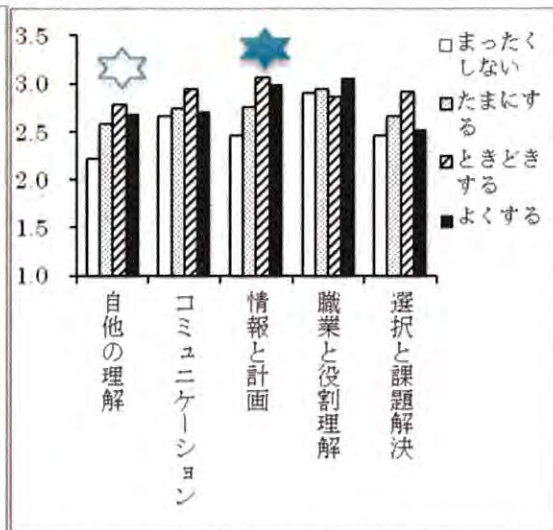


Fig. 4 きょうだいとの会話頻度とキャリア意識

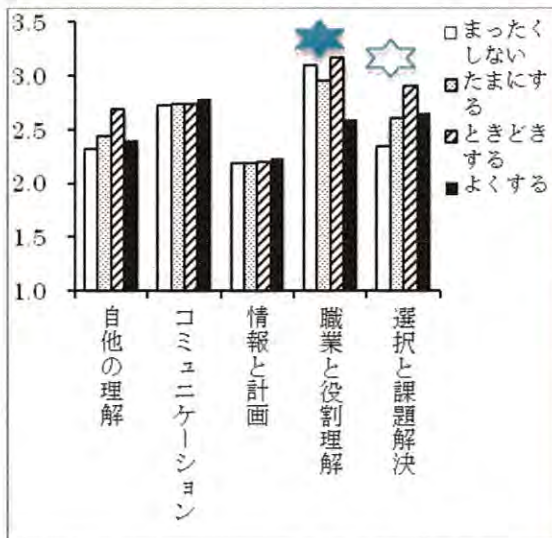


Fig. 5 友達との会話頻度とキャリア意識

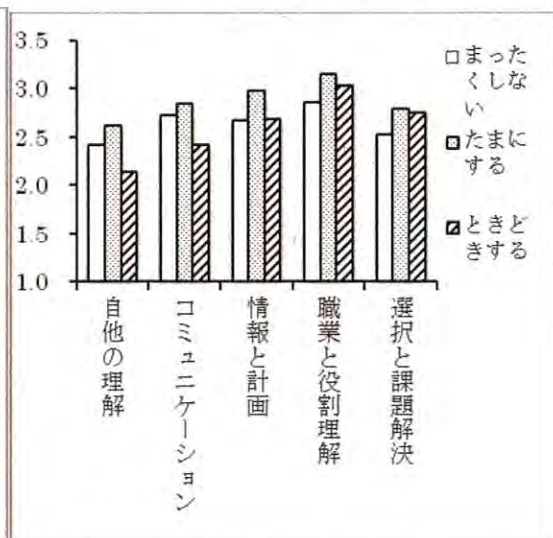


Fig. 6 教師との会話頻度とキャリア意識

### 4 総合考察

キャリア総合選択授業、アントレプレナー教育に基づく、生徒の発達段階に応じた計画的なキャリア教育プランは、4領域8能力の「人間関係能力（「自他の理解能力」・「コミュニケーション能力」）」を伸長させるための発表活動をもち、そのまともにおいて「情報活用能力（「情報収集・探索能力」・「職業理解能力」）」の活用を生徒に求めるようにした。諸プログラムにおいて「将来設計能力（「役割把握・認識能力」・「計画実行能力」）」の育成をめざし、それらの体験を通じて自らの生き方を拓く「意思決定能力（「選択能力」・「課題解決能力」）」が向上すると考えた。同様に、これらの活動は基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の育成に対応していると考えられる。

全生徒のキャリア意識の各項目に対する評定結果を分析した結果、「基礎的なコミュニケーション能力の育成」、「将来のための学習や進路計画の重要性への認識」、「職業観・勤労観の育成」、「将来の夢や希望をもっている生徒が多数を占めていること」などに成果がみられた。一方で、生徒達は「将来の重要性」は認識し、「ぼんやりした夢」を抱いていて、「今の学習などの努力の大切さ」も分かっているものの、「より広い視野

で調べ学習」をしたり、「将来目標のための努力をしたり」という実際の行動に表れるところまでは至っていないという結果もみられ、今後のキャリア教育の継続的・発展的充実の必要性が示された。

調査に関する今後の課題としては、より多数のデータに基づく分析を行うことがある。もっと人数が多いと、学年による変化なども比較可能になり、過去の同一校の調査結果との比較も可能となる。また、例えば、自分の将来や進路に関する会話がキャリア意識の発達に及ぼす影響等について、中学生に自由記述を求めたり、面接調査をするなど、より深い、質的な調査を行うことにより、その影響過程などを明らかにすることができると思われる。

中学校におけるキャリア教育推進には、生徒の実態に即したキャリア発達段階の特徴を理解し、各学年におけるキャリア発達課題を踏まえたキャリア教育プログラムを有効的に教育課程に位置づけて指導することが重要である。本研究によって生徒のキャリアに対する意識向上は見られたものの、実際の行動には至っていないため、キャリア教育推進モデルプランをさらにバージョンアップさせ、適切な評価や効果測定により生徒のキャリア促進に寄与する研究を継続することが望まれる。

## 引用文献

Jepsen, D. A., 1975, Occupational decision development over the high school years. *Journal of Vocational Behavior*, 14, 119-133.

古川雅文, 長瀬久明, 寺尾裕子・鈴木正敏, 横川和章, 神田睦美, 眞崎克彦・坂本和也・藤井彩香, 森 敏雄, 成瀬雅巳, 柚本和也, 相川美和子, 奥田桂子, 2013, 学校教育研究センター・プロジェクト研究発表会「児童生徒の日常生活及びキャリア発達に関する調査研究 (3)」発表資料.

国立教育政策研究所, 2002, 「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」.

兵庫教育大学附属中学校, 2013, 「キャリア教育実践記録」.

文部科学省, 2006, 『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き』.

文部科学省国立教育政策研究所, 2011, 『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書』.